

國風と布引の瀧

米 溪

矧川の所謂「月白く砂白く水亦白き」瀬戸内海に、更に白の白を以て鳴るものは、布曳の瀧にあらざるや。

山甚だ高からざるも、翠の松、色一入濃やかにして、懸崖幾丈、所がらとて、花崗岩の山骨處々に顯はなるが、風刀雨鑿に砂となれるもの、細砂涅まずして溪流自から清暢、夏期一掬の味は、蓋し骨に沁するものあらんとす。此の瀧、今は神戸市水道の根源となりて、貯水池に遮らるゝより、水量亦昔日の如くならず、従て瀧の美たる跌宕雄偉の觀を殺ぐものあらんも、亦清爽閑雅の趣を加ふるなくんばあらず。

雌瀧は神戸より程遠からず。高さ二十余丈、岩

を穿ちて奔放し、飛沫衣袂を濕ほす。雄瀧は稍登攀して之を得たり。三十餘丈とか。一條の素練曲折三四、高く巖角を壓し、一樹の疎松、斜に水を擁して翠滴らんとし、日斜にして白玉散ずる所、彩虹横に帶して優婉天女の翡翠の扇を翳して舞はんと欲するが如し。之れ其の大觀なり。若し夫れ露霖連日、風、樹梢を鳴して横まに吹くに當りては、濁水漲りて山爲に動き、飛泉激して地亦震はんとす、謂ふに瀧の偉觀は、却て、此の時に在るべきか。在原業平の、昔、遊べりと云ふ砂の山は今、圓山と稱して、一簇の松樹丘を包み、程遠からぬ處に在り。平氏の土脊尾兼康が雷に逢うて震死せしは、此の雄瀧の邊りにや。近年迄は瀧壺の邊りに迄降り立ちて、觀を擅にするを得たるも、今は此の水、亦下流の貯水池に導かるゝより、近

く降ること叶はず、

余我が國風の内に、此の瀧に關せしものを求むるに、其の純白なる所を詠せしもの、跌宕の趣を寫し、もの、懷を濁水の様に寄せしもの、千態萬様なるも、概して、雄渾壯大の情に乏しきは、想の至らざるものありてか、瀧の名に泥みてか、水の姿の優しき爲か。乞ふ左に少しく之を掲げん。

純白の布引

布曳の瀧の白糸うちはへて 後鳥羽院

誰れ山風にかけてはすらん

山姫のみねの梢にひきかけて 輔 親

晒せる布や瀧の白波

後茶入道前内大臣

日にみかさ月にぞ晒す白玉の

亂れて落つる布曳の瀧

久方の天つ少女のなつ衣 有 家

くも居に晒す布曳のたき

水の色たゞ白雪と見ゆるかな 顯 房

誰晒したるぬのひさのたき

山人の衣なるらし白妙の 讀人不知

月に晒せる布曳のたき

或は皜々の糸を以て譬へ、或は山人の白衣に比し、或は雪、或は玉、皓々たる素練、高く雲際に掲る。梢の綠翠一層の翠を増し、水の色、白愈々白を磨く、秋天露白く、月亦白さとき、白白相映するの情、想見すべからずとせんや、之れ瀧の名を得る所以にして、聽て之れ等の詞ある所以なり

跌宕の布引

水上はいづこなるらん白雲の 輔 親

うちより落つる布引の瀧

天の河雲のみをより行く水の 頼 氏

あまりて落つる布引の瀧

水上は霧たちこめて見ぬども 読人不知

音ぞ空なる布引の瀧

天の川これや流れの未ならん 読人不知

空より落つる布引のたき

上、九天を想望して瀧の大を譬へ、銀河を拉し

來つて奔放の勢を示し、琴々鞞々、聲山谷を動か

して、水源霧罩め雲悠悠たる様を寫す、稍々跌宕

の趣を得たりと云ふべし。

雲居より轟き落る瀧の瀨は 皇后宮權太夫經信

たい白糸の絶にぬなりけり

の如きは、純白跌宕併せ得たるか如くなるも、

遂に布曳の名に泥みて、下半力なきは惜むべから

ずとせんや。予謂へらく、瀧の美は雄大に在り、

高壯に在り。而して、瀧の雄大高壯なるものは、

五月雨月を互りて濁水横溢する時に在り。山動き

谷咎へ、奔放仰ぐべからざるが如きは、乃ち以て

瀧の美を見んとす、偉を見んとす、霪雨日長く、

窓前の梅子將に熟せんとして、満目みな陰濕、細

溪尙黄、瀧豈獨り世外のものならんや。

五月雨に水のみな上澄みやらで 行 能

晒すかひなき布引のたき

晒し得ぬ色かとぞ見る五月雨に 中臣祐經

にむりて落つる布引のたき

うちはへて晒す日もなし布引の 守永親王

瀧の白糸五月雨のころ

水の澄みやらさるを嘆じ、布の色濁れると比ぶ

折角豪宕の景を捉へながら、名に泥みて、遂に織

化し去りたるは惜むべしとせんか。併し、豪放も

一風流、清楚も一雅趣のみ、瀧と云へば、直ちに豪放の姿を想起するは、自然の數にして、真趣の在る所なるも、瀟洒優雅、自然其の名の由來する所にして、其の姿の表する所、此の瀧の如きは、強ち、罪を作者にのみ歸すべからざらんも、少くも、名に泥みて瀧の真趣を閉却したる迹は、歴々徴すべきにあらずや。題に泥みて瀧の眞を忘れざらんは、見ん人の注意なるべきなり。況んや之れ等の國風、彼の

日照香爐生紫烟

遙看瀑布掛長川

飛流直下三千尺

疑是銀河落九天

と曰へるものに比すれば、雄大跌宕、寧ろ之に存して、着想亦遂に此の一絶の外に逸する能はず。其の稍々趣を異にせるものも、纔かに、織折を競ひて氣魄に乏しきは、大に察すべき所ならずや

國風源流二千年の昔に比して、今に至る迄、遂に甚だしき進歩革新を見る能はざるは、泥つ所在にわらざるか。否か。

(完)

金の亞米利加

亞米利加人は全体虫歯の多い人間なので有名で、従つて亞米利加と云ふ國は齒科醫術の發達して居るので有名だが、此國で毎年天國へ昇る人が其遺骸と共に地下に遺して行く入齒金の總額は實に大したもので、其額は無慮百萬圓に達するそうだ、そこで或人の統計によると斯う云ふ風にして三世祖も續いたなら地下に埋れる人齒の金が總計二億八千六百萬圓となり、即ち現時合衆國に流通する總金額に相當するだけの巨額に昇るそうだ。

松川浦に遊ぶ

小林雨峰

予の東奥に遊ぶとこゝに三たび、遊ぶごとに何事をかものす、この稿數年前草せしもの今年また此のあたりに至れるも遂に松川浦に遊ぶず、されども曾つて見し、浦曲の景色思ひ出されて